
Introductory Article

二つの^{エレジー}哀歌から考える「トランプ 2.0」の行方

——サイモン『ハムレット工場火災』を
ヴァンス『ヒルビリー・エレジー』とあわせ読む——

宮 田 伊知郎

2021年の議会襲撃事件とのつながりが取り沙汰され、「機密文書の持ち出し」等で有罪判決すら受けていたトランプ元大統領が大統領に返り咲いた。この、いわゆる「トランプ 2.0」を可能にした要因の一つに若き副大統領 J.D. ヴァンスの存在があげられるだろう。ヴァンスを一躍有名にしたのは 2016 年に出版された彼の自伝『ヒルビリー・エレジー——危機にある家族と文化の思い出』(*Hillbilly Elegy: A Memoir of a Family and Culture in Crisis*) である (ヴァンス 2017)。16 年の大統領選挙でトランプ大統領が尽くすことを誓った「忘れ去られた人びと」の記録ともいえる同書は、ラストベルトで暮らす貧しいスコッチ＝アイリッシュの家生まれたヴァンスが、アルコールかつ薬物依存の母ベブのもと育つも、祖母「ママウ」ボニーを中心とする家族愛により逆境を乗り越え、海兵隊を経て最終的にイェール大学ロースクールを修了、弁護士となる克己の物語である¹。いわゆる「アメリカン・ドリーム」ものである本作品は、2024 年の時点で 300 万部を売り上げるベストセラーとなり、2020 年には Netflix 社により映画化もされ多くの人に視聴されている。日本でも光文社が 2017 年にいち早く同書の翻訳を出版したが、「『トランプ旋風』の背景を言語化し、広く知らしめた」と評され、トランプ現象を知るための一級の資料として読まれ続けている (『朝日新聞』2024. 7.19 朝刊)。

しかし、ヴァンスが『ヒルビリー・エレジー』において描くスコッチ＝アイリッシュや白人労働者階級の状態のみが切り取られ、貧困層の実情として捉えられることについては、一アメリカ史研究者として違和を感じざるを得ない。彼の「ヒルビリー」の描写には当事者から単純化やステレオタイプ化などの批判がされているし (Karshner et al. 2019)、そもそもラストベルトの白人労働者のみが 20 世紀後半における製造業の衰退のなかで困窮したわけで

¹ 「忘れ去られた人びと」については、(青野ほか 2020) を参照のこと。

はない。さらに、ヴァンスがトランプ政権に入ったいま、『ヒルビリー・エレジー』の一番の意義はトランプ支持層の描写ではもはやなくなっている。トランプに寄り添うヴァンスの存在が示すのは、「トランプ 2.0」においては貧困からの脱出は可能であるというメッセージに他ならない。つまり、貧困を克服した彼の物語は、貧しい人間がいかに逆境を乗り越えるべきか、政府や市場が貧困に対しどう向きあうべきかを示す指南書としての役割を担っていくと言えるだろう。

今回紹介する歴史学者ブライアン・サイモンの『ハムレット工場火災——「チープ化」が生んだ現代アメリカの悲劇』(The Hamlet Fire: A Tragic Story of Cheap Food, Cheap Government, and Cheap Lives 以下『ハムレット工場火災』)は、ヴァンスの回顧録とはほぼ同じ時代・内容を扱っているものの、人種・ジェンダー・階級、そして地域(アメリカ南部)の要素に注目し、より複雑な現実を描き出すのに成功しており、ヴァンスの物語を相対化するために『ヒルビリー・エレジー』とあわせて読むべき一冊だと言えよう(Simon 2017: サイモン 2024)。『ヒルビリー・エレジー』と『ハムレット工場火災』は、いずれも 1970 年代の不況を人びとがどう経験し、そこからなにが生み出されたかについて示すことを通して、アメリカが抱える問題を描き出している。この二つの解釈の違いを知ることが、現代アメリカへの理解を深めるのみならず、第二次トランプ政権の行方を占ううえでも有用となるだろう。以下、二冊の内容を比較検討しながら、このことについて明らかにしていきたい。

『ハムレット工場火災』そして『ヒルビリー・エレジー』には共通点が多い。まず、いずれも哀歌として位置づけられる。ヴァンスの哀歌は、タイトルにあるように貧困のなか失われつつある誇り高いヒルビリー文化に向けてのそれであるが、『ハムレット工場火災』は、南部の田舎町で発生したある火災に巻き込まれた人びとに向けての哀歌である。その火災とは、1991 年 9 月 3 日に南部ノースカロライナ州ハムレットにあるインペリアル食品生産社の鶏肉加工工場で起こった災禍であり、先進工業国においては通常考えられない規模の、破壊的な事故として記憶されている(Harvey 1996: 335)。この火災が、全米に衝撃を与えた理由は、犠牲者 25 人のうち 12 名が黒人で、多くがシングルマザーであったことだけでなく、工場が外から施錠されており、従業員が燃えさかる屋内に閉じ込められたことにあった。悲劇を運命づけた歴史潮流を紐解き、弔いとしているのが『ハムレット工場火災』だといえよう。

また、どちらの本も 70 年代における好景気からの経済の衰退を物語の土台としている。『ヒルビリー・エレジー』は 84 年生まれのヴァンスの回顧録であるものの、概ね祖父母が職を求めケンタッキー州ジャクソンからオハイオ州ミドルタウンへと移動した戦後からストーリーを始める。ミドルタウンに製鉄所を構えていた大手鉄鋼メーカー・アームコにヴァンス

の祖父が職を得、祖父母は豊かな生活を手に入れるも、国際競争のなか業績の落ちた同社が製鉄所を閉鎖すると、ヴァンス家は凋落の一途を辿る。一方、ハムレットは田舎町であるものの、1980年代にかけての経験はミドルタウンと重なる。20世紀始めに鉄道駅として発展したハムレットは、大手シーボード鉄道の一拠点だった。組合に守られ、貧しい南部にありながら全国基準の待遇の雇用を供給する鉄道業は、かつてから活気のあった繊維産業と併せて、田舎町に豊かさをもたらした。その恩恵は、映画館や劇場、瀟洒なホテルが建ち並ぶ目抜き通りや瀟洒な郊外住宅地に具体化していった。しかしながら、トラックや飛行機が鉄道に変わり、繊維産業が国際競争によって衰退していくと、ミドルタウンと同様ハムレットも急速に豊かさを失っていったのである。

ヴァンスもサイモンも、この衰退がなにを生み出したかに目を向ける。『ヒルビリー・エレジー』が衰退の結果として強調するのが怠惰や依存の文化である一方、この『ハムレット工場火災』が提示するのは、蟻地獄のように貧困から抜け出せない構造の登場と定着である。従軍し社会上昇を遂げ、ヒルビリーを相対的に観察できる立場になったヴァンスは、衰退の結果として（祖母のように）自立心や誠実さを重視し、一族への侮辱を許さない哲学を守り通すヒルビリーが絶滅の一途にある一方で、儉約もできず、奔放で、働こうとしない文化に甘んじるヒルビリーがマジョリティとなる状況の出現を指摘する。パーソナルな世界で衰退の影響を描くヴァンスと異なり、サイモンは衰退の影響を政治、消費文化、人種関係などの広い観点から分析する。主要産業を失ったハムレット市やノースカロライナ州は、低賃金、反組合文化、また行政による優遇措置を売りに、企業誘致によって衰退を乗り越えようとする。それに応えた企業の一つが組合と規制が強いペンシルベニア州を脱し、生き残りのため、より収益性の高い土地を求めていたインペリアル食品生産社であった。同社工場の労働環境ならびに待遇は悪かったが、行政による改善が求められることはなく、求職者が途絶えることなかった。そうした状況に耐え働き続けるしか貧困層には選択肢がなく、ワーキングプア状態が黒人女性のあいだに定着していったのである²。

両者とも肥満を問題視するが、その原因の捉え方が異なる。ヴァンスの「白人労働者階層」の「食事と運動」に関する分析によれば、多くのヒルビリーにとって、朝食は菓子で「昼はタコベル」、「夜はマクドナルド」だった。かれらは「料理はほとんどしない」し、運動にも縁がなかった（ヴァンス 2017: 236）。このように、肥満の慢性化を怠惰の文化の延長線上に位置づけるヴァンスに対して、サイモンは異なる解釈を提示する。曰く、（火災の犠牲になったような）底辺の労働者階級は、収入を得るため調理にかかる時間と金がなく、安価な冷凍

2 企業活動に対して、労働者側も、行政も声を上げない状態の形成についてはサイモンの「第二章 沈黙」を見よ。また、規制の無力化については、「第六章 規制緩和」が参考になる。

食品やファストフードに頼るしかない。かれらが食卓にあげたのは、食用鶏の大量生産方式やとうもろこし由来のディップソース等の開発により低価格で売られたチキンテンダーやチキンナゲットなどの高カロリーな（そして、皮肉にもインペリアル食品生産が製造していたような）鶏肉加工食品であった。そんな食生活で体重が増したとしても、収入と時間がない労働者にジムで運動ができる余裕はなく、緊縮財政のなかかれらが住むような地域に公営の体育施設やジョギング用のトレイルが創られるはずもない。サイモンによれば、貧困の構造がゆえに、かれらは自己規律の欠如を指摘されるような体形になる³。つまり、だらしなさのシンボルとされるような肥満体形は、構造に翻弄された結果に他ならないのである。

ヴァンスとサイモンが決定的に異なるのは、貧困と人種の関係についての認識である。依存状態に馴致してしまったスコッチ＝アイリッシュとよく似た状況にある存在としてヴァンスはインナーシティの黒人をあげる。曰く、貧困や政策に対する研究を渉猟するなかで、「うちの地元を完璧に描いて」おり「心をとらえられた」と評価するのが、社会学者ウィリアム・ジュリウス・ウィルソンの著書『アメリカのアンダークラス——本当に不利な立場に置かれた人々』であった（ヴァンス 2017: 230）。ウィルソンにとって、現代の貧困化は「産業転換」の結果であり、その影響に人種の違いは大きく関係しない。福祉依存の「アンダークラス」には、白人、ラティーノなどさまざまな人種集団が肩を並べて存在しているとする彼は、人種にこだわらない貧困対策の重要性を訴えるのである（ウィルソン 1999: 第6章）。たしかに、ヴァンスの回顧録は人種エスニックの面においても多様性に満ちている。怠惰なヒルビリーが多出する一方で、イェール時代の指導教員は中華系で、後の妻となるガールフレンドのウシャはインド系であり、ヴァンスが描く現代アメリカではカラブラインドなメリトクラシーが実現しているように思える。

一方、『ハムレット工場火災』のなかでは黒人は、白人エスニックと同じ階級のマイノリティとして位置づけられることはない。かれらは奴隷解放の後もシェアクロッパー（種や土地などを地主から借り、その代金を収穫の一部を持って返却する小作人。その大半が借金漬けにされた）に追いやられ、人種差別体制のなか、満足な教育や職へのアクセスの機会が限られ、社会上昇が望めなかった。そのような制約は公民権運動により「撤廃」をされる。しかし、それは製造業が衰退し、かつ女性も低賃金労働市場に本格的に参入をしていった時期に重なり、黒人が安定した雇用に就くことは困難であった。よって、労働条件・環境の悪い鶏肉加工工場で働く人びとには黒人、なかでも女性が多かった。サイモンによれば、チープな食品を提供する鶏肉加工業は、過去から続く人種差別体制が維持する貧困層なしに成立するもの

3 20世紀後半における食鳥産業の急速な成長を描いた「第三章 鶏／チキン」、また労働者の体形の変化について議論している「第五章 身体」を参照のこと（サイモン 2024）。

ではなかった。カーターそしてレーガン政権期に進行する規制緩和は、こうした貧困層の労働環境をさらに悪化させ、1991年の惨劇の舞台を整えていったのである。

先述した様に、トランプ2.0の時代を知るためのテキストとして、副大統領となったヴァンスの『ヒルビリー・エレジー』が再び脚光を浴びている。2024年の大統領選挙は、インフレーションという「現実問題」を見据えたトランプの勝利と考えられがちである。コミカルなほどの市場主義の貫徹をいとわないトランプ政権によって、政府の介入や規制は否定され、大企業はますます利潤追求の姿勢を強くするだろう。このとき、インフレの最大の犠牲者である貧しい人びとには、いかなる救済の道筋が示されるのだろうか。克己や自助、あるいは拡大家族、教会などの私的機関の活用による貧困解消を「実現」した現職副大統領の経験が、このときのモデルとなるのは間違いない。しかし、彼の哀歌自体、一つの見方に過ぎないことをもう一つの哀歌『ハムレット工場火災』が教えてくれる。『ヒルビリー・エレジー』自体を、新自由主義の時代——サイモン流に言えば、食品、政府、いのちがチープ化する時代——を代表する「史料」として扱うことも可能になるだろう。トランプ2.0のアメリカを理解するためにも、『ヒルビリー・エレジー』とあわせ是非手に取ってほしい一冊である。

本研究はJSPS 科研費 18KK0054、V20K12315 の助成を受けたものです。

参考文献

青野利彦・倉科一希・宮田伊知郎編、2020、『現代アメリカ政治外交史——「アメリカの世紀」から「アメリカ第一主義まで」』ミネルヴァ書房。

Harvey, David, 1996, *Justice, Nature & the Geography of Difference*, Malden, MA: Blackwell.

Karshner, Edward, Anthony Harkins, Meredith McCarroll, 2019, *Appalachian Reckoning: A Region Responds to Hillbilly Elegy*, Morgantown, WV: West Virginia University Press.

Simon, Bryant, 2017, *The Hamlet Fire: A Tragic Story of Cheap Food, Cheap Government, and Cheap Lives*, New York: The New Press.

サイモン、ブライアン、2024、『ハムレット工場火災——「チープ化」が生んだ現代アメリカの悲劇』玉川大学出版部。

「バンス氏、人生に誓う「米国第一」指名受諾演説」『朝日新聞』2024年7月19日。

Vance, J.D., 2016, *Hillbilly Elegy: A Memoir of a Family and Culture in Crisis*, New York: HarperCollins.
(関根光宏、山田文訳、2017、『ヒルビリー・エレジー——アメリカの繁栄から取り残された白人たち』、光文社。)

Wilson, Julius Wilson, 1987, *The Truly Disadvantaged: The Inner City, the Underclass, and Public Policy*,

Chicago: University of Chicago Press. (青木秀夫監訳、平川茂、牛草英晴訳、1999、『アメリカのアンダークラス——本当に不利な立場に置かれた人々』明石書店。)



写真1：火災現場となった工場の跡地には、現在、追悼碑が建つ。(撮影筆者 2022年9月19日)



写真2：ハムレット市のダウンタウンの一部は廃墟化している。そこには、人種差別が存在しなければ意味を持たない落書きがあった。（撮影筆者 2022年9月19日）

